

21 世紀 COE プログラム 「都市文化創造のための人文科学的研究」について

阪 口 弘 之

今日、都市グローバル化の中で、それぞれの都市を個性化させるもの、それこそが都市文化と呼ばれるべきものであろう。輝きと伝統を誇り、一方で様々な矛盾を孕む都市文化の諸相を歴史的視野の中で直視し、品位と活気あふれる国際文化都市の再構築へむけて、新しい世紀の大学が進むべき方向は明確である。

大阪市立大学は、大阪市が大阪という都市の品格と責務をかけて設置した日本最古の公立大学である。大阪は難波宮以来、帝都、宗都、商都というように、時さまぎまの姿を見せながら、常に日本と世界、とりわけアジアへの玄関都市としての役割を果たしてきた。そのことは大阪市立大学が大阪という都市を基盤にしながらも、常に世界にむかって発信し続ける研究教育大学としてあることと軌を一にする。

世界の玄関都市ならではの異文化混融、多民族共生ともからみあいつつ、都市アイデンティティを主張する大阪文化の独特の有り様は、その光と闇の両面において、世界の諸都市にしばしば共通してみられる文化事象としてもある。一方に一層の輝きを期待され、他方に緊急の解決を迫られる今日的な都市課題ともなっている。私どもの 21 世紀 COE プログラム「都市文化創造のための人文科学的研究」は、そうした世界の諸都市にみられる輝きと矛盾が様々な交錯する都市文化の有り様と課題について検証し、都市再構築へ向けての提言母体となる国際共同研究組織として形成されるものである。

上記の目的にむけて、私どもは当該研究拠点を世界の知性が様々な世界個別事例をもちよ

り、相互に比較検証する研究交流の場として設定する。具体的にはヨーロッパとアジアに大きく軸足を置いて、世界の一流大学と組織的で緊密な研究交流を積みあげながら、大阪・日本・アジア・ヨーロッパというグローバルな規模のなかで国際的な研究機関としての役割を果たす。その際それぞれの交流提携大学と我が大学とが共通して抱え込む重要課題を共通テーマに設定して解決を図ることを特徴としたい。それぞれの都市の学問的頭脳として在る世界の一流大学と我が文学研究科とが世界に向けて開かれた国際性のもと、学問と実践を社会的責任のうちに媒介し、人類社会に寄与する道がここにかかれるであろう。

例えば、大阪は僧契沖以来国学の中心として在り、その周辺に市井人による学問の府が開かれ、降って江戸末期から明治にかけては、西洋文化移入の窓口としてあった。その伝統は我が文学研究科の精神理念の底流として今も脈打っている。一方にまた文楽や歌舞伎を中心に伝統演劇のまぎれもない中心地としてあり、そうした伝統文化のもつ意義を世界的芸術文化の広がりの中に位置づけることもまた我々の責務である。大阪市はまた世界の諸都市が直面している今日的諸矛盾をきわめて象徴的に背負い込んでもいる。ホームレスの増加、多民族共生に伴う文化摩擦、都市開発や生活環境の変化に伴う市民意識の変容等々である。その実態を歴史的経緯を踏まえて客観的に把握し、分析することも急務である。こうした課題においてもわが研究科はこれまで多くの実績を誇り、確かな信頼

を得ているが、今後新しい研究拠点の形成によって、まさしく世界的な視点から有効な提言を行い得るであろう。

今回の21世紀COEプログラムは、第三者評価に基づく競争原理により、国公私立大学を通じて、大学院博士課程レベルの専攻等の世界的研究教育拠点の形成をめざすというものである。当初「トップ30」とも呼ばれた通り、文部科学省の鳴物入りの重点的支援事業としてスタートし、どこの大学も必死の取り組みをみせた。私どもの文学研究科も、主要拠点専攻や事業推進担当者（18名。研究評価対象者10名を含む）の選考には苦労もあったが、さまざまな議論を経て、歴史学を中心に、文学研究科の総力を挙げてこれに対応することを決定した。文学研究科には、今回の拠点専攻と位置づけた「哲学歴史学専攻」の他、「人間行動学専攻」「言語文化学専攻」、更には来年度に新しく後期博士課程を立ち上げる「アジア都市文化学専攻」の4専攻があるが、これらが「都市文化」をキーワードに、一体化して今回の事業にのぞもうとしたのである。ピンポイントよりも、いわば「文学研究科」あげての総力で、世界的拠点の形成をめざそうとしたのである。幸いに、この方向は、大学の「都市型総合大学」理念とも絶妙に合致して、審査会で高い評価を得るところとなった。今私たちはその責務の重さをひしひしと感じとっているところである。

私どものプログラムの具体的な内容は、後にも述べるように、A比較都市文化史研究、B現代都市文化研究、C都市の人間研究の3つの研究を柱として、これらを相互に関連づけながら推進させる。そして、その成果を公開する場として、『都市文化研究』は公刊された。更に、国際シンポジウムなど、個別研究が大きなまとまりをみせた時には、『大阪市立大学文学研究科叢書』として、順次刊行していく予定である。大阪市立大学文学研究科発信の『都市文化研究』が大阪及び世界の都市文化創造のための重要な提言の場となることを念じてやまない。

そうした立場から、私どもが文部科学省に提言した「研究拠点形成実施計画」及びプログラム採択のための最終審査（ヒヤリング）での説

明本文を今ここで改めて紹介して、内外の御理解、御支援をいただきたいと思う。前者は文学研究科内に設置されたCOE等基本方針策定委員会で榮原永遠男委員長（評議員）を中心にまとめられたものであり、後者はその骨子を改めて私の方から説明したものである。

21世紀COEプログラム拠点形成計画

1. 拠点形成の目的・必要性

【I】これまでの実績

これまで文学部・文学研究科は、以下の注目すべき研究業績をあげてきた。

(a) 日本学士院賞では、小島憲之（国文学）、天野元之助（東洋史学）、佐藤武敏（東洋史学）の3教授に加え、平成13年度に小林道夫教授（哲学）が受賞し、計4名の受賞者（うち小島教授は恩賜賞）を出しており、研究水準の高さを示している。

(b) 難波宮跡の発掘調査では、山根徳太郎博士（紫綬褒章）・直木孝次郎教授を中心として国内外に知られる顕著な学問的業績をあげた。その成果は、現在に至るまで都市史研究の基礎であり続けている。

(c) 野宿生活者調査（平成10、11年度実施）は、山本登・大藪寿一教授らの同和地区・スラム地区の社会実態調査の実績をふまえて実施された。その成果は、政府のホームレスに関する施策の基礎資料として活用されるなど特筆すべきもので、大阪市をはじめ、諸都市の施策の科学的根拠となっている。

このうち特に（b）は都市の歴史的研究、（c）は都市の生活様式にかかわる研究である。

本拠点形成計画は、これらの実績の上に立ち、本学の基本計画に従って、平成13年度に再編された文学研究科が取り組む組織的研究である。

【II】本拠点形成の目的と特色

(1) 本拠点は、都市に生きる人間のいとなみの基礎となる文化を向上させるために、過去から現在まで、都市を文化の視点から学問的に

深く考察し、都市が文化を育み、文化が都市を発展させてきたという都市と文化の相互関係を明らかにすることを目的とする。従来の都市研究は、経済学・政治学・建築工学などに比重があったが、本拠点の特色は、文化に焦点を当てて都市を研究することにある。

(2) 研究教育拠点として、文学研究科に「都市文化研究センター」（仮称、以下センター）を設ける。センターには、歴史学を中心とする人文科学の諸分野の研究者等が所属し、3つのチームを構成して研究教育にあたる。このような編成で都市の文化を研究するところに、本拠点の他にない特色がある。

(3) 本拠点では、都市に蓄積されてきた文化的伝統（学問・思想・宗教・文学・芸能・生活様式・社会構造等）を歴史的に解明するという基礎研究を重視する。たとえば大坂商人がどのような経済的実力を背景に思想・学問を形成し、文楽等の芸能にかかわったのか、というテーマを、史料調査にもとづいて解明する。

(4) その成果をふまえて、都市文化の現状を調査研究する。大阪をはじめハンブルク・バンコクなどの西欧・アジアの諸都市を対象として、多民族共生にともなう諸文化の共存と摩擦、都市開発による生活環境の変化によって生じた新旧の価値観や生活様式の対立・多様化、都市生活と芸術文化との関係、都市住民の精神生活などを、実態調査その他の方法で研究する。

(5) 上記(3)(4)の研究を客観的に進めるために、西欧にかたよることなく、アジア的視点による都市の文化的研究を重視する。そのため、西欧に加えて東・東南アジアの主要大学の所在都市にサブセンターを置き、ネットワークで結んで研究を進める。

(6) 将来この分野の研究を担い、本拠点の研究を継続しうる若手研究者を育成する。

【III】本拠点形成の必要性

(1) 大阪市は、歴史文化の伝統豊かな国際的都市であり、都市を文化の視点から研究するにふさわしい好適な対象である。本拠点が大阪市に基盤を置くことは、研究を推進するうえで有利な条件である。

(2) 本拠点は、文化的観点による都市研究

の成果を社会に積極的に発信する。それによって、都市自治体の文化諸施策を支え、文化団体の活動の学問的基礎を提示し、都市文化の水準向上に寄与する。

2-1. 研究拠点形成実施計画

【I】国際学術交流の推進

(1) 大阪市立大学は、ドイツのハンブルク大学と学術交流協定を結び、大学間で学術交流を積み上げてきた。現在、文学研究科と同大学との間で「大阪市立大学プロジェクト研究」として「大阪市とハンブルク市をめぐる都市・市民・文化・大学」の共同研究を継続中である。本拠点における都市の文化的研究は、これを基礎として推進できる。また、文学研究科は、ロンドン大学、ドイツ「恵光」日本文化センターとも学術交流協定を締結している。

(2) これら西欧の大学等との共同研究に対して、アジア的視点による都市の文化的研究を共同して行いうる有力大学として、タイ・チュラロンコン大学、インドネシア・ガジャマダ大学およびインドネシア国立芸術大学、中国・華東師範大学とも、学術交流協定を結んでいる。それにもとづき、これらの大学と共同研究の体制を作り上げつつある。またソウル大学・フィリピン大学・サウスウェールズ大学などの研究者とも、都市文化に関する共同研究が可能である。

(3) ハンブルク市・ロンドン市・上海市・バンコク市・ジョクジャカルタ市・ペキン市にサブセンターの施設を確保し、共同研究推進の基地とする。

【II】研究教育チームの設定と研究の推進

(1) 「都市文化研究センター」に次の3つの研究教育チームを設け、学術交流協定を締結した諸大学の研究者と協力して、文化に焦点を当てて都市を研究する。各チームは、研究機能とともに教育機能を有する。

A 比較都市文化史研究（港市としての大阪・ハンブルク・バンコクの都市文化形成の比較、大阪とジョクジャカルタにおけ

る都市生活史と芸能・文化遺産の関係など)

B 現代都市文化研究(西欧・アジアの諸都市における多文化共生・異文化コミュニケーション・多様な生活様式のあり方などの実態調査・分析)

C 都市の人間研究(過去・現在の都市に生きる人間の思想・宗教・文学, 都市生活と芸術・芸能の関係など)

(2) 3チームの研究を, 相互に前提としあいながら推進することで, 過去から現在まで, 都市を文化の視点から研究し, 都市が文化を育み, 文化が都市を発展させてきたという都市と文化の相互関係を明らかにする。

(3) 事業推進担当者で構成する「センター会議」が事業の推進を全体的に統轄する。「センター会議」のもとに「常任委員会」, 各チームの「運営委員会」, 「事務局」を置く。

「常任委員会」は拠点リーダーと副リーダーで構成する。「運営委員会」は副リーダーを中心に運営する。「事務局」に事務担当者を複数名雇用する。

(4) 後期博士課程大学院学生を, 各自の研究計画にもとづいて, COE 研究員として各チームに参加させ, 本拠点の将来を担う若手研究者として養成する。

(5) 国内外の優れた研究者を招聘する。後期博士課程大学院学生を対象とする討論主体のゼミナールを開き, 3チームの研究者と共同研究を行うなど, 世界の頭脳と積極的な交流をはかる。また, 国際シンポジウム, 研究会を適宜開催する。

(6) 本拠点のホームページを立ち上げ, センター・サブセンターや共同研究を行う大学を結ぶ研究教育のネットワーク環境を確保し, 研究成果の提示や意見交換の場とし, 優秀な COE 研究員を確保する手段とする。比較都市文化史, 現代都市文化, 都市の人間に関する複合的データベースを構築し, ホームページに組み込む。

【III】研究成果の公開と社会への還元

(1) 各チームの研究成果は, ホームページ, 学術雑誌『都市文化研究』(仮称)に公表する。そのうち発展性のある研究, 国際シンポジウムの成果は, 『大阪市立大学文学研究科叢書』(仮

称)の1冊として刊行する。

(2) 大阪市をはじめ世界で文化の創造に取り組んでいる都市自治体に対して, 研究成果を発信し, 具体的提言を行う。メディア・ホームページの活用, 公開講演会の開催により, 研究成果を行政担当者, 文化産業関係者, 一般市民に還元する。

2-2. 年度別の具体的な研究拠点形成実施計画

平成 14 年度:

(1) 初年度は, ABC の 3 つの研究教育チームの編成, サブセンターの設置とこれに関係する大学との研究交流の基盤整備に力を注ぐ。そのため(a) ~ (d)を行う。

(a) 各チームに参加する研究者・大学院学生(COE 研究員)を決め, 「運営委員会」を設ける。

(b) 3チームのメンバーである研究者(以下, 研究者という)をハンブルク市・バンコク市・ジョクジャカルタ市・上海市に派遣し, サブセンターを設置する。

(c) ※ この研究者はサブセンターに滞在しつつ, ハンブルク大学・チュラロンコン大学・ガジャマダ大学・インドネシア国立芸術大学・華東師範大学との研究交流基盤の確立をはかる。

(以下※印をつけた項目は, 本研究の期間を通じて維持するものである。)

(d) ※ 同じく他の研究者をドイツ「恵光」日本文化センター・ロンドン大学等に派遣して, 研究交流基盤の確立をはかる。

(2) ※ 国内外の優れた研究者を招聘し, ゼミナール等を開く。

(3) 都市文化研究のための基礎的調査・共同研究の準備にとりかかる。

(4) 比較都市文化史研究に関するシンポジウムを準備する。

(5) ※ 研究拠点ホームページを立ち上げる。比較都市文化史, 現代都市文化, 都市の人間に関する複合的なデータベースの構築に着手し, ホームページに組み込む。

(6) ※ 『都市文化研究』を発刊する。

(7) 『大阪市立大学文学研究科叢書』の刊行計画を立案する。

平成 15 年度：

(1) 2 年度目は、初年度に引き続き、研究交流基盤の確立に努力するとともに、教育面での交流を展開する。また、アジア都市文化学専攻後期博士課程設置に伴い、同専攻を拠点専攻に加え、拠点としての充実を図る。

(a) 前期に研究者を北京市、ロンドン市に派遣し、サブセンターを増設する。

(b) ※ この研究者はサブセンターに滞在しつつ、中国社会科学院・ロンドン大学との研究交流基盤の確立をはかる。

(c) ※ ハンブルク大学・ドイツ「恵光」日本文化センター・ロンドン大学・チュロンコン大学・ガジャマダ大学・インドネシア国立芸術大学・華東師範大学等と、大学院学生を交換して研究教育交流の基盤を確立する。

(d) ※ サマースクールを開催する。

(2) ※ 都市文化研究のための基礎的調査・共同研究を実施する。

(3) 後期に比較都市文化史研究に関する国際シンポジウムを開催する。現代都市文化研究に関する国際シンポジウムを準備する。

(4) ※ データベースを公開する。

(5) ※ 『都市文化研究』『大阪市立大学文学研究科叢書』を刊行する。国際シンポジウムの成果をその 1 冊として刊行する。(以後、各年度とも同じ)

平成 16 年度：

(1) 研究教育チームの運営、参加する研究者・大学院学生の見直しを行う。

(2) 後期に現代都市文化研究に関する国際シンポジウムを開催する。都市の人間研究に関する国際シンポジウムを準備する。

平成 17 年度：

(1) 後期に都市の人間研究に関する国際シンポジウムを開催する。5 年間の研究を総括する国際シンポジウムを準備する。

平成 18 年度：

(1) 5 年間の研究を総括する国際シンポジウムを開催する。

3. 教育実施計画

【I】教育実施計画の背景

(1) 本拠点の中核専攻である哲学歴史学専攻と人間行動学専攻では、後期博士課程の入学人数は、毎年安定して確保されており、教育拠点を形成するのに十分な数の後期博士課程大学院学生が在籍している。また、課程博士の学位を取得するものも増加傾向にある。さらに、アジア諸国からの留学生が多いことも、本拠点形成の目的にかなっている。

(2) 本研究科ならびに国内外の大学の優秀な後期博士課程大学院学生を、研究計画書にもとづいて、3 研究教育チームのいずれかに参加させる（以下、COE 研究員という）。

【II】教育の基本方針

(1) 文学研究科の後期博士課程は 3 つの専攻によって構成され、各専攻はいくつかの専門分野に分かれている。これまでの後期博士課程大学院学生に対する教育は、ややもすれば専門分野の枠内で行われてきた。しかし、本拠点の教育は、これにとらわれないで行う。世界から優れた研究者を招聘し、専門分野や、場合によっては専攻にまたがるゼミナールを開き、これに参加する COE 研究員の視野の拡大と研究の充実を図る。

(2) 3 チームには、上記専門分野を超えて研究者が参加している。COE 研究員をこれに参加させることにより、都市の文化に関する幅広い識見を身につけさせる。これによって、従来の専門分野にとらわれていたのでは得られない有効な研究視角を定めさせる。

(3) COE 研究員を対象とするサマースクールを開き、国内外の優れた研究者や事業推進担当者等により、フィールドワークや調査研究の方法、学会における発表方法の指導を徹底して行う。

(4) 優秀な COE 研究員には、サブセンター

などでの長期海外研修や、国際学会または3チームで行う研究会での発表の機会を与え、研究活動を活性化す。また、本学のTA制度やRA制度を活用し、後輩の指導を通じて能力を発揮できる場を保障する。

(5) 本プログラムにより学位を取得したCOE 研究員については、学長に申請して都市文化研究センターの博士研究員として採用する。これによって、業績の優れた大学院学生を経済的にも支援し、さらなる研究発展の場を保障するとともに、本拠点の将来を担う若手研究者として養成する。

(6) 研究拠点ホームページ上で、かかる諸制度を国内外にアピールし、優秀な大学院学生をCOE 研究員として確保することに努める。

(7) COE 研究員が本拠点に参加してあげた研究成果の内容は、ホームページにて公表するとともに、『都市文化研究』もしくは『大阪市立大学文学研究科叢書』に掲載する。

プログラム採択のための最終審査での説明本文

拠点リーダーの阪口でございます。本日はこのようなヒアリングの機会を頂きまして、光栄に存じております。

それではさっそく、私共のこれまでの研究教育活動と、拠点形成計画について説明をさせていただきます。簡単なレジュメ〔省略〕を用意しましたので、御覧頂きながらお聞きいただければと存じます。

まず、これまでの研究教育活動についてでございますが、私共、大阪市立大学は、只今も学長が説明申し上げましたように、建学の精神に則った「都市型総合大学」として、都市を学問創造の場として捉え、大学が市民の精神文化の中心になることを願って来ました。大学としての普遍的な使命を果たすことは勿論でございます。それと同時に、公立大学としてのありようも常に意識して参りました。

そうした中で、文学研究科は、これまで哲学・歴史学・国文学という最も基礎的な学問分野で、恩賜賞を含めて四名の日本学士院賞受賞者を出

してきました。これは文学研究科の研究水準を示すものであると自負しています。加えて、大阪に設置された公立大学ならではの顕著な業績を収めてきたと思います。大阪は御承知のように、難波宮以来、日本の文化移入の表玄関として、異文化交流、多民族共生が最も典型的に認められる都市であります。そうした背景の中で、山根徳太郎博士らの難波宮発掘調査が国内外に知られる顕著な学問成果を挙げました。また、大阪に圧倒的に多い在日朝鮮人、沖縄出身者らを対象とした多文化共生等にかかわる意識調査の数々や、そして近年では特にホームレス問題をめぐる研究の蓄積も注目を集めている所です。日本政府の今般のホームレス法案整備の科学的根拠にもなっておりますし、東京、横浜など国内諸都市はもとより、海外においても、たとえば来年度から実施される上海市の再開発事業の施策決定にも大きな影響を与えていると承っております。こうした研究は、私ども文学研究科が組織を挙げて取り組んで来た、まさしく世界に誇れる学問的業績であろうかと存じますが、もし幸いにしてCOE に採択されましたならば、こうした方向を一段と国際的に展開して参りたいと考えております。

そこで次に、その拠点形成計画について説明させていただきます。

私共の研究拠点は、都市文化創造に向けて、歴史学を中心に人文科学諸分野から貢献することを目的としたものであります。過去から現在まで、都市を文化の視点から考察し、都市が文化を育み、文化が都市を発展させてきたという「都市と文化」の相互関係を明らかにすることにあります。

従来都市研究は、経済学・政治学・建築工学といった分野に比重がありまして、文化的側面には十分な注意が払われてきませんでした。しかし、今日、世界的に都市化が進行する中で、それぞれの都市を個性化させ、そこに住む市民の生活を豊かにするもの、それこそを我々は「都市文化」と呼ぶべきだと考えております。一方において、輝きと伝統を誇り、しかし他方では、様々な矛盾をはらむ都市文化の諸相を世界的視野の中で捉え、品位と活気あふれる国際文化都

市の構築に人文諸科学はいかに寄与することができるか、これが私どもの研究教育拠点の課題であります。

このように、本拠点の特色は、文化に焦点を当てて都市を研究することにあるわけですが、具体的には、「拠点形成計画調書」にも記しましたような、三つの研究を柱とします。即ち、

1. 比較都市文化史研究

これは歴史的研究からのアプローチです。たとえば、後にも述べますドイツのハンブルクを例に御説明しますと、ハンブルクは大阪やバンコク・上海などと同様、港湾を軸に都市が形成されました。現在もウォーターフロント開発などの共通した都市課題を持っていますが、そうした共通した町に形成されてきた歴史的な文化の比較研究は、都市史の新たな展望を可能にすると思います。

2. 現代都市文化研究

これは多文化共生・異文化コミュニケーションの分野です。また、もう一度ハンブルクで御説明しますと、東ドイツ吸合、EU 統合時に象徴的に見られたように、多様な民族人口が大量に流入して、多文化共生と、その一方で深刻な文化摩擦を生じました。こうした課題の克服に向けた研究分野です。

3. 都市の人間研究

これは思想・宗教・文学・芸能といった分野です。

この三つの研究を相互に関連させながら、これを文学研究科がこれまで行って参りました研究実績の上に大きく展開させて、都市文化研究の世界的拠点を目指したいと考えます。文学研究科は、その意味では、「都市文化研究」に向けて、思い切った方向転換を図ることになります。来年度に予定される「アジア都市文化学」後期博士課程の立ち上げなどもその現れの一環です。勿論、申し上げるまでもないことですが、その際には現行の大学院の教育体制との整合性、連続性は充分に考慮されなければならないと考えております。幸い、私どもは、昨年、大学院を再編重点化しまして、大学院専任教員 80

名から 90 名体制で院生教育にあたっておりました、新旧教育体制の間に軋轢等はまったく生じないものと確信しております。

さて、この度の拠点形成実現に向けて、私どもが最も重要視しておりますのが、国際共同研究組織の立ち上げでございます。この点について、次に説明申し上げます。

まず、私どもは、文学研究科の中に「都市文化研究センター」を設置しまして、これとリンクさせる形で、これまで私どもと国際交流協定を締結して、いろいろな共同研究を積み上げて参りました、たとえばドイツのハンブルク、アジアではバンコク・ジョクジャカルタ・上海などの大学にサブセンターを設置し、これらをネットワークで結んで、都市文化研究の国際共同研究組織を立ち上げたいと考えております。

そして、このセンターには、国内外の優れた研究者を招聘致します。一方、サブセンターには本学研究者と共に大学院生を COE 研究員として派遣し、世界の頭脳と積極的な交流を図り、若手研究者育成の場にしたいと考えております。

また、そうした国際共同研究の成果を踏まえて、国際シンポジウムやフォーラムを適宜開催することや、学術雑誌および『大阪市立大学文学研究科叢書』の刊行も予定しております。同時に、各研究チームに関係するデータベースを国内外に広く公開します。既に本学では「都市問題資料センター」の膨大な資料を中心にデータベース化を着々と進めておりますが、これに加えて、本学が世界に誇ります学術情報総合センターの研究者スタッフ 12 名の全面的な援助も頂けますので、さらに一段と学術的・社会的貢献を果たすことができると思います。

次に、これらの拠点形成計画に向けての資金計画、およびその実現性について説明させていただきます。

これは無論、COE に採択されるかどうかで大きく変わるかと思いますが、私どもとしましては、以下のような見通しの元に今回の計画を立案した所でございます。

1. サブセンターの設置都市は、ほとんど

が大阪市との姉妹都市であり、大学設置者としての大阪市からの援助が得られること、また、COEに採択されたならば、大学からも人的、および財政上の特別支援を約束されています。

2. サブセンターを予定している大学とは、たとえばハンプルク大学とは、「都市・大阪・市民・大学」をキーワードとしたプロジェクト研究を推進しているなど、いずれの大学とも太い信頼関係で結ばれていて、サブセンターの設置および運営については、基本的に問題がありません。

3. 文学研究科内の「アジア都市文化学専攻」に、先程も申し上げましたが、来年度、後期博士課程を新たに立ち上げますが、この専攻学生には、アジア地域での長期フィールド研究を義務付けている関係上、ジョクジャカルタには、今回のCOE事業推進担当者でもある指導教授の研究室も確保されていて、

たとえばそれらをサブセンターとして発展的に継承することも可能であります。

4. 文学研究科は、この度、創立五十周年を迎え、これを記念して、主として大学院生の教育支援を目的に、本研究科独自の「教育促進支援機構」を設立しますが、ここからも支援が期待できます。

ちなみに、今年度・来年度の国際シンポジウムも配付資料にありますように、既に計画済みでありまして、ドナルド・キーン博士など、本学研究科ゆかりの著名人や、私どもが交流協定を結ぶ大学などから超一流の研究者をお招きすることになっています。

以上のような点で、私どもは研究の永続性について一定の見通しを持っておりませんが、できますればCOE採択の榮譽に輝き、計画自体を盤石なものとして、「都市文化学」の世界拠点を目指したいと考えております。どうぞよろしくお願い申し上げます。